



2025年（令和7年）

6月号（No. 961）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

山岳古道集中山行in国東半島 神仏習合千三百年の道を歩く

昨年、熊野古道で実施して好評を博した集中山行。本年も「全国山岳古道調査」を盛り上げるべく九州・国東半島で催された。国東は千三百年の歴史を誇る神仏習合の地で、両子山を中心に「六郷満山」と呼ばれる峰々に「峯入り行」の道が拓かれている。独特の宗教文化と豊かな歴史に触れながら歩いた2日間のレポート。

国東独特の宗教文化に触れる

山岳古道調査プロジェクトは、昨年の熊野古道集中山行に続き今年には120古道の1つ、「国東半島 祈りと修行の道」の一部を歩くイベントを、4月25日と26日の2日間にわたって開催した。参加者はおよそ80名。日本の山岳文化や歴史、宗教に興味のある人はもとより、国東半島の岩山を歩いて

みたい、見てみたいという地元九州をはじめ北は北海道からの会員が、国東半島独特の宗教文化に触れた2日間だった。折しも開催時期は芽吹きと花の季節で、国東半島の山々はパステル・カラーの色合いに染まり、山々を形作る岩にはフジの花が、寺院への道はツツジやシャクナゲなど季節の花々に彩られていた。山懐の寺院や至る所にたたずむ路

目次

山岳古道集中山行in国東半島	
神仏習合千三百年の道を歩く ……	1
「特別事業補助金」を利用して	
支部主催で「埼玉やま塾」を開講 ……	4
アルパータ峰登頂百周年ツアーと	
ジャスパーの山火事復興支援 ……	6
山笑う春の上高地 ……	7
追悼 ……	8
山の名著再読 ……	10
東西南北 ……	12
支部だより ……	13
図書紹介 ……	14
新入会員 ……	15
会務報告 ……	17
ルーム日誌 ……	17
会員異動 ……	18
INFORMATION ……	18
編集後記 ……	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

傍の石塔は、訪れた私たちにこの地方の歴史と文化の奥深さを感じと味わわせてくれた。

ゴールとなった両子山の山頂に一同が会したとき、展望台から見えた国東半島の全容とそれを取り囲む海や島、さらに遠く霞む由布岳や鶴見岳のシルエットを見たときの感動は、おそらくいつまでも参加者の心に残っていくに違いない。この集中山行は、日本山岳会会員に広く古道の魅力を味わってもらいたいというプロジェクト・メンバーの気持ちと、全国の会員に国東半島の歴史や文化に触れてもらいたい、その魅力を感じてもらいたいという東九州支部の方々の想いが発端となり、企画運営の原動力となった。

日本山岳会はただ山に登ること

だけではなく、日本の山岳文化・歴史を楽しむ会でもあるということをも多くの会員に知ってもらい、実感してもらいたい。そのために、このような集中山行は創立120周年が終わっても、機会があれば引き続き開催していきたいと思う。(全国山岳古道調査PTリーダー・近藤雅幸)

春爛漫の2日間、歴史や文化を味わいつつ古道を歩く

北は北海道から南は沖縄まで約80名の会員が集まった今回の集中山行。4月26日15時に、思い思いのルートから両子山山頂へ集合する基本コースに加え、オプション4コースが企画された。

国東半島の峯道の要所をチャーター・バスでつなぎながらの行程



中山仙境随一の名所、無明橋を渡る

で、概要は以下のとおり。

25日…中山仙境↓霊仙寺・実相院・六所宮↓大不動岩屋↓旧千燈寺跡↓五辻不動 *Aコース⇨中山仙境から、Bコース⇨霊仙寺から合流。

26日…無動寺↓天念寺・川中不動・鬼会の里↓長安寺↓両子山頂↓両子寺 *Cコース⇨無動寺から、Dコース⇨天念寺から合流。

4月25日(金)

8時、Aコース34名がバス2台に分乗しホテルを出発。山行サポートを担当する本部の同好会マウンテンカルチャークラブ(MCC)のスタッフが、留意事項を説明しながら中山仙境入り口へ。

登山口で安東桂三支部長はじめ東九州支部の会員と合流。ルート

の先導やエスケーパーの付き添いなど、地元からの参加が心強い。

火山由来の凝灰角礫岩により形成された、尖った岩峰が連なる中山仙境。夷耶馬とも呼ばれ、2018年に国の名勝に

指定された景勝地であると同時に、山岳仏教の修行の地である。

そこかしこに廃仏毀釈を免れた石仏を見ながら細かいアップダウンと連続する鎖場を進み、2本の石を拌み合わせにした無明橋へ。コース随一の名所で、短いが高度感は一変だ。

細い岩尾根に出ると展望が開けた。最高点の高城でも標高317mだが、周りに切り立つ壁の中腹にのぞく岩屋の険しさに、古の峯入り行の苛酷さが想われる。下山路のトラバースには水平に張られた鎖が多数。鎖はどれも真新しく、良く整備されていた。

霊仙寺で昼食後、バスで尻付岩屋へ。鮮やかなツツジの横を抜け大不動岩屋に向かう道すがらの植

物談義では、「ヤマフジの天ぷら、甘くておいしいの!」という東九州支部員の弾んだ声が耳に残る。

西の不動最大の岩屋から岩峰群を堪能したのち、六郷満山を開いた仁聞菩薩入寂の地、旧千燈寺へ向かう。半肉彫りの仁王像、奥の院の五輪塔群など、どちらを向いても史跡が並ぶ。

苔むす森を抜けてこの日最後の絶景スポット、五辻不動(東の不動)へ登ると、曇り空ながら眼下にうつすらと姫島が望めた。

ヘルメット推奨コースの参加者だけあつて、みなさん岩稜歩きを楽しんだ様子。途中、行程遅れで昼休憩が短くなったグループもあったが、見事に巻き返して予定より1時間も早くホテルに帰着。さすがに健脚ぞろいである。

4月26日(土)

快晴の下、無動寺から歩行開始。ご本尊の不動明王は忿怒身ながら穏やかな慈悲相が特徴という。お寺を懐に抱くようにそびえる巨大な岩壁、無動寺耶馬を背にして天念寺耶馬へ踏み入る。

険しい斜面を登り、1人立つのもやつのトラバースを経由して本日最大の難所、垂直に近い壁を

下りる鎖場へ。鎖は2列だが、手前で行列になるほど全員通過には時間を要した。

たどり着いた天念寺では、頭上に咲き乱れるヤマフジに感嘆の声が上がる。時間が押して、列の後方は長岩屋川に鎮座する川中不動を横目で見ながら先を急ぐかたちになったのが惜しまれる。

ここからは快調に歩を進め、昼休憩の長安寺には予定より30分早く到着。花の寺としても知られる境内をゆつくり散策することができた。折しもシャクナゲの盛りで、白や淡紅色のみならず、真っ赤な西洋シャクナゲがひととき目を惹く。石段を登った散策路からは豊後高田の街並みも見渡せた。

そして、いよいよ六郷満山総持院たる両子寺から両子山へ。

朱塗りの勾欄が美しい懸造り構造の奥の院に詣で、急登からお山巡りコースに入る。重なる岩の隙間を通り抜ける針の耳、四方の岩壁のそちらこちらにたたずむ百体観音など、余さず焼き付けようと撮影する手と目が忙しい。

途中からは舗装された登山道で山頂を目指す。車が通行できないほど壊れた路面に急勾配とあって



4月26日15時、国東半島の盟主、両子山山頂に参加者67名が集合

きつい道だが、約束の15時までに橋本しをり会長を含む67名が登頂を果たした。

下山後、両子寺本堂にて全員で登山安全祈願を受ける。「日本山岳会両子山登山者一同」の心身清浄、身体堅固などを祈念していた。

汗を流したのちホテルベイグラインド国東にて懇親会が行なわれた。橋本会長、松井督治・国東市長の挨拶に続き、4月に発足した東京

支部の飯田邦幸支部長の発声で乾杯。準備段階から本部とともに様々尽力された東九州支部の安東支部長と、同支部所属で国東半島峯道トレイルクラブ顧問の山岡研一会員から改めて国東について同いつつ各所で旧交を温め、交友を深めるひとときとなった。

安全祈願の際、両子山を下りてくると見えなかったものが見えるようになる人が多い、と御坊のお話があった。今回の参加者には、何

が見えただろうか。

(マウンテンカルチャー
ークラブ・兵頭亜紀)

「国東半島 折りと修
行の道」とは

東九州支部は、日本山岳会創立120周年記念事業の全国山岳古道調査の対象として、大分県国東半島の峯入りの道を選んだ。

国東半島は、中心に古い火山の両子山がある火山半島である。盟主の両子山の標高は720mの低山であるが、火山性の岩は浸食され、

硬い岩盤は残り、峨々たる山塊を形成している。この険しい山々に、山岳密教が発生したのも必然と考えられる。

言い伝えによれば、仁聞菩薩が養老年間の初め、国東半島の各地に28の寺院を開基し、多くの摩崖仏も仁聞の作と言われる。仁聞菩薩は、宇佐八幡神の化身であったと言われたり、架空の人物と言われたり、4人いたと言われたり、不明なことが多い。

江戸時代までは、国東半島のお寺の住職は一生に一度峯入り行をすればよいとされ、峯入り行とは、仁聞菩薩が開いた183ヶ所の霊場を巡ることを意味した。その江戸時代の峯入り行は300kmを超え、約1ヶ月かかった。明治時代になると峯入り行は行なえず、昭和34(1959)年に復活したが、100年以上も峯入り行が行なえなかったことで多くの情報が欠け、完全に再興することとはならなかった。多くの宗教関係者や歴史学者、考古学者が、現在も明らかにしようとしている。

東九州支部が、その峯入り行再興の手掛かりとして、大分県教育委員会による昭和56(1981)年

3月25日発行『大分県文化財調査報告 第五十四輯「歴史の道」調査報告書 峯入りの道』を参照して調査した。23回の踏査で、距離は306・8kmとなった。我々も踏査を通じて、国東半島の良さを再発見したのであった。

今回、当地で集中山行を企画していただき、また、多くの日本山岳会会員が山岳古道に触れることができて良かったと感謝している。ただ、今回は一部分の古道だけの紹介となったので、紹介できなかった多くの古道を、また紹介したいと思っている。ぜひ再訪をお願いしたい。

(東九州支部支部長・安東桂三)



「国東塔」について参加者に解説する安東桂三支部長

REPORT

「特別事業補助金」を利用して 支部主催で「埼玉やま塾」を開講

「埼玉やま塾」は2018年度から第1期がスタートしました。公益社団法人として安全登山を振興し社会貢献するためには、次世代の会員を増やす活動が必要と考えたからです。その目的は「事故なく、安全に登山を楽しむことのできる、自立した登山者の育成」です。以下に、第4期（2022年度）から第6期（24年度）の活動概要を報告します。

■「埼玉やま塾」の組織／運営

＊塾長…大光山一・支部長

＊講師…平川陽一郎会員（常務理事、マウンテンガイド協会会長）

＊技術サポート…飯塚雅信会員

（埼玉支部・安全登山委員長）

＊スタッフ…会員の中からサポート参加を申告してくれた有志

（15～16名前後）。有志の中から、さらに1～2名の事務局を設定し、全体のマネージメントを行なっています。スタッフが参加可能な日を調整すること、また、

埼玉支部 稲越洋一

役割の割り振りが大変かつ重要な作業です。

＊講義体系…机上講習4回。浦和の公的な集会室を利用して各回を開催（机上と実技は交互にスケジュール）。塾生の募集人員は15名前後、各回の参加スタッフは3～5名程度。

実技講習4回。第1回…大高取山、6月／第2回…武甲山、7月／第3回…伊豆ヶ岳、9月／第4回…雲取山（1泊2日）、10月（5期は9月）。

実技は、ステップアップを考慮した山域を選定、講義テーマに合わせた体力的・技術的な内容を体験できることを意図して行程を立案しています。参加スタッフは各回4～6名程度を配置。

プロジェクトの準備は、前年度の12月～1月ごろから始めます。講義体系に基づき、講師からの日程案を受けて全体スケジュールを設定し、スタッフ募集を開始。1月末にスタッフ・ミーティングで

役割分担などを決定し、「埼玉やま塾」のスタート（募集開始）となります。

募集方法ですが、当初は募集チラシ（印刷物）を作成し、スタッフ会員が知り合いや山用品店・山岳誌など、それぞれの人脈に頼って配布することを主としました。埼玉支部のホームページにも掲載しましたが、会員の知己やチラシによる参加誘導が多数でした。しかし、4期以降、徐々にホームページからの誘導による参加者が増えており、5期でのチラシ配布は一部の山用品店のみとし、6期ではチラシ配布は行ないませんでした。が、ホームページからの参加誘導は75%の実績で、一般の方にとって登山教室を探すツールとしては、SNS系の役割が大きくなっていることを実感しています。

記録としては、全ての机上講義はビデオカメラで録画し、振り返りのため、塾生限定でYoutubeに限定公開しています。

また、実技山行においては、山行の状況をスタッフ・カメラマンが写真記録（集合写真を含む）を行ない、同様にGoogle photoにて塾生に公開しています。



道迷い・遭難防止に必須の読図講義（大高取山にて）

■第4期概要

4期の受講生は14名で開始しました。第1回／第2回実技は梅雨の時期であり、実は降雨の中での山行体験も期待できるのですが、武甲山での下山時、急な雷雨に見舞われた以外、幸いにも好天に恵まれた期でした。

1期から3期は、講義テーマの「岩場・鎖場」環境として谷川岳（天神尾根）を選定していましたが、実施日が休日のため、年々増加する登山者による渋滞発生や、移動時間の問題（遠方で登山開始が遅くなる）により、4期から「岩場・鎖場」が体験できる伊豆ヶ岳に変

更、同時にロングコース(子ノ権現への縦走)も組み入れました。本期の塾生からの入会者は7名。

■第5期概要

5期の受講生は12名で開始しました。4期までは、「やま塾」運営に関わる事務局は支部の幹部が行なっていました。5期からは、過去の塾卒業生が初めて事務局を担当する体制をスタート(前任者がサポートします)。同時にスタッフも過去の塾卒業生でカバーできる体制としました。なお、体制構築が遅れたため募集開始も遅れましたが、会員からの推薦、ホームページなどを活用し、短期間で募集



岩場や鎖場の通過方法を実地に学ぶ(伊豆ヶ岳にて)

を終了しています。

第3回実技の伊豆ヶ岳では、前日の雨で鎖場(岩場)が濡れて滑りやすくなっていたため、初めて講師によるフィックス・ロープとハーネス装着の実践(一部の塾生に對して)が行なわれました。

第4回実技の雲取山では、宿泊後の下山日に待望!! の降雨となり、雨中登山を体験しましたが、厳しい下山行程を無事に終えることができました。本期の塾生からの入会者は7名。

■第6期概要

6期の受講生は16名(前年の入会者4名含む)で開始しました。5



雨の中を下山、ストック・ワークの講習を受ける(雲取山にて)

期までの募集形態では、申込み先メールは支部の事務局長を設定していましたが、事務局長の負担低減のため、今期から受講生との窓口(電子メール)を、「やま塾」事務局に一本化する体制を作りました(「やま塾」の事務局担当者がYahooメールを運用)。塾生とのやり取りは「Be」にて適宜、塾長・講師・スタッフと共有します。

第3回実技の伊豆ヶ岳では、男坂(岩場・鎖場)を通過予定でしたが、自治体から公式に通過自粛の通達が出たため、公益事業であることから巻き道を選択する行程に変更しました。第4回実技の雲取山も、前期同様、宿泊翌日は朝から降雨となり、雨中山行の良い体験となりました。本期の塾生からの入会者は7名。

■成果と今後について

大きな目標である「やま塾」卒業後の入会状況ですが、入会後に退会された方もいますが、現在、全期を合わせると34名が在籍しています(「やま塾」をスタートした2018年度以降の入会者の内、57%が塾卒業生)。

運営の主体が、「やま塾」卒業生

に変わった5期以降は、スタッフの人選や運営細部のマニュアルを作成し、事業の継続性を図っています。スタッフ参加のみなさんは、個人として仕事やプライベートな予定などをお持ちのなか、ボランティア参加してくれています。が、塾卒業生としての意識は高く、予定をやり繰りして協力していただきました。

塾の卒業生からは、支部の運営に関わる各委員会の役員として6名の方が参画、また、本部の「指導者養成講習会」へも多数参加しており、次世代のリーダーとしての期待とともに、「やま塾」の効果は確かと言えるでしょう。

実技講習に同行するスタッフの役割も特に重要です。受講生とのコミュニケーションを通して、受講生の志向を引き出してより良い方向に導き、山の仲間としての意識を喚起することにより、受講生本人の意識向上とともに、入会への動機付けとなることは、過去の実績から明らかです。今後は、卒業生たちの向上心の芽を育み、山の仲間としてのクラブライフを継続させていける方向性を示せるかが支部の課題でしょう。

RECONSTRUCTION SUPPORT

アルバータ峰登頂百周年ツアーと
ジャスパーの山火事復興支援

吉川正幸

今から100年前、日本山岳会の6人の若者が、日本最初の海外遠征としてロッキー山脈を目指しました。そして、カナダ・ジャスパーから山に入り、1925年7月21日にアルバータ峰（3619m）の初登頂に成功しました。アル



険しい表情を見せるアルバータ峰東面(撮影：益田幸郎)

バータ峰登頂は、23年9月の関東大震災の傷も癒えぬなかで、日本国民を元気づける出来事でした。日本山岳会のマナスル峰挑戦と初登頂も、戦争で疲弊した日本の復活を象徴し、また国民を元気づけました。マナスルに初挑戦した53

年の隊長には、アルバータ峰遠征の隊員であった三田幸夫元会長が、56年の初登頂隊には、同じく横有恒元会長が隊長を務めたので、アルバータ峰遠征の成功は、日本山岳会の礎となったことが分かります。

*

アルバータ峰遠征には第2幕がありました。初登頂の際に、遠征のスポンサーであった細川護立侯から預かったピッケルは、侯の希望に添って山頂に残されました。それを48年に第2登したアメリカ隊が持ち帰りましたが、シャフトが折れ、

石突部分は氷結した山頂に残されました。

65年に日本の長野高校山岳班隊が第5登に成功し、残されていたシャフトの石突部分を、それとは気付かずを持ち帰りました。アメリカ隊が持ち帰ったヘッドとシャフト部分と、長野隊が持ち帰ったシャフトと石突部分は、その後、アメリカと日本で長い間保管されていたことが芳賀孝郎永年会員によつて発見され、日本山岳会の97年の年次晩餐会席上で、1本のピッケルとして元の姿に戻ったのでした。

*

1925年、アルバータ峰山頂に残され、その後合体したピッケルは今、ジャスパー・イエローヘッド博物館で大切に保管・展示されています。ところが、2024年7月にジャスパーの町は、山火事により建物の3分の1が焼失するという被害を受けました。ただ、博物館は奇跡的に焼失から免れました。

そこで、日本山岳会有志は、ジャスパー復興支援にもなるように、アルバータ峰登頂百周年を記念して2025年7月にミュージアム

を訪問するツアーを企画しました（ツアーは希望者が多く締め切りました）。ジャスパー・イエローヘッド博物館とカナダ山岳会の有志が、登頂日と同じ本年7月21日に記念式典を催していただくことになっています。この式典には、30名を超える日本山岳会会員などが参加する予定です。

私たちは、ジャスパー市が大火からの復興支援のためにアルバータ峰の壁画を制作する費用として、寄附金を募っていることを知りました。私たちも、できるだけこのことをしたいと思っています。日本山岳会には深い縁のあるアルバータ州ジャスパーの復興を支援するため、会員の方々には、下記口座まで寄附をお願い申し上げます。寄附金は全額ジャスパー市に寄附いたします。

（日本山岳会アルバータ峰登頂百周年プロジェクト）吉川正幸・益田幸郎・黒川恵

◆振込みは郵便振替払込用紙を用いて「ジャスパー復興寄附金」と記載するようお願い申し上げます。

「日本山岳会120周年記念事業」の口座記号番号は90150-2-32527です。

さんけん通信

山笑う春の上高地

今年も2月上旬の上高地に入り、上高地山岳研究所(山研)の様子を見てきました。全国的に積雪の多い冬でスキー場もにぎわいましたが、上高地も前シーズンに比べると積雪は多く、バルコニー下で約1・5mの積雪がありました。

今年の山研開所(小屋開き)は4月19・20日で行なわれました。上高地開山祭まで日にちがあるので、旅館や山小屋は、まだ営業開始前の準備をしている時期です。上高地内の道路は除雪されていますが、昨年と比べると山研入り口付近は積雪が20〜30cmほどありました。これは、この時期の上高地として

は珍しいことではありません。

昨年・一昨年と違い、今回はその雪掻きから始まりました。東京と名古屋から集まった山研運営委員会メンバーと、神奈川工大の先生・学生を合わせ20人近い人が集まって雪囲い外し、水道開栓、室内清掃、設備点検・調整などの小屋開け作業を行ないました。また、神奈川工大メンバーを中心に水力発電稼働のための作業(水源地での取水調整、導水管の掘り出し、発電水車調整、バッテリー交換など)を行ないました。2日間の好天に恵まれて、開所作業は無事に終了しました。

山研管理人 山田和人

からのバス便は開通しているものの静かな上高地と思いきや、前年までと違い海外の方々がバスツアーで大勢訪れていました。

1週間後の4月27日は、上高地開山祭です。毎年曜日に関係なく27日と決まっています。この日は朝から好天となりましたが気温は低く、ダウン・ジャケットが必要な天候となりました。今年は日曜日でもあり国内の方々も大勢集まり、2時間前から河童橋に陣取って開始を待っていました。

前座としてアルプホルンの演奏が披露され、11時に開始宣言。行政機関の来賓挨拶の後、穂高神社による神事が厳かに行なわれました。私も上高地町会スタッフとして会場設営、観客誘導などに関わりましたが、外国の方がスマホの翻訳アプリを使って「神様はどこにいるのか」と聞いてきたので、「あそこに見える山々自体がご神体ですよ」と返してあげると、にっこり笑って納得した様子でした。最後に獅子舞が奉納され、酒樽の鏡開きをして開山祭は12時過ぎに終了、振る舞い酒の時間となりました。日本人だけでなく、外国の方々も真っ白な穂高を見上げなが

らのお酒を楽しんでいました。

ゴールデン・ウィーク(GW)には、何組かの会員グループが山研を利用してくれました。雪の穂高の風景を楽しんだり散策をされる方々が中心ですが、中には槍沢でスキーをする方もおられ、また、岳沢・天狗沢を滑る方も。GWの翌週末には、YOUTH CLUBが雪上訓練合宿を行ないました。岳沢にも雪がたっぷりあつて良い合宿ができた、とのことでした。

5月第3週にはニリンソウが咲き始め、山研のバルコニー下はニリンソウの絨毯(じゅうたん)となりました。このころには樹々の芽吹(めう)きが始まり、山研の窓からのジャングルムは、11月までお預けとなります。その後はスプリング・エフェメラルと呼ばれる花々が次々と咲き始め、明神・徳沢間ではニリンソウやエゾムラサキ、サンカヨウなどが目を惹かせてくれています。歩道の地面を注意深く見ているとウスバサイシンが地味な花を付けていました。この先6月1日にはウエストン祭が開催され、上高地はにぎわいのシーズンを迎えます。

今シーズンも、会員の皆様のご利用をお待ちしております。



山研のバルコニー下のニリンソウ群落

この時期はまだ気温も低く、朝は零度近くまで気温が下がります。雪が消えた地面も花は見られませんが、落葉樹の樹々の芽吹きも未だです。開所が終了した山研の窓からは、奥穂のジャングルムが望めました。開山祭までの1週間は、新島々

追

OBITUARY

悼

追悼 齋藤惇生さん

横山宏太郎



齋藤 惇生(さいとう・あつお)
会員番号5373 名誉・永年会員
1929年9月 熊本県生まれ

1949年 京都大学入学、同時に山岳部入部
1962年 サルトロ・カンリ初登頂
1973年 京都大学ヤルン・カン遠征隊
1979～80年 日本山岳会珠穆朗瑪登山隊・偵察隊長、本隊副隊長
1985年～ 日中合同ナムナニ隊副総隊長、中日ネ3国チョモランマ/サガルマタ友好登山隊日本隊北側統括隊長、京大シジャパンマ隊副総隊長ほか
1997～99年 日本山岳会会長
2025年3月11日 逝去、満95歳

齋藤惇生さんが95歳で亡くなりました。数多くのヒマラヤ登山隊に参加、活躍されるとともに、高所での経験・知見を基に高所医学の発展に貢献された。また、本会京都支部(現京都・滋賀支部)の初代支部長(1986～97年)を、さらに本会会長も務められた。一方、95歳まで現役医師でもあった。

私にとっては山岳部の18年先輩で、AACK(京大土山岳会)でお世話になり、またチョモランマ

偵察隊・本隊(79、80年)でも一緒に緒できた。国内外とも「Yさん」で通る方なので、ここでも尊敬する大先輩には失礼を承知のうえで「Yさん」と呼びたい。

まず特筆すべきは62年のサルトロ・カンリ(7742m)初登頂である。AACKとカラコラム・クラブ(パキスタン)の合同隊で、Yさんは高村泰雄、ラジャ・バシール両隊員とともに山頂に立った。次いで73年、AACKヤルン・カン隊に参加された。

日本山岳会チョモランマ登山隊に参加された経緯は――

79年8月3日、西堀榮三郎会長(ヤルン・カン総隊長)から電話が入る。「ワイさん、中国から日本山岳会にチョモランマ登山の許可が来た。秋に偵察隊、来年春に本隊を出す。急な話だが秋の偵察隊長として君に行ってもらいたい。これはヤルン・カンで世話になった私のお礼だと思ってくれ。」そう言われても、医師として責任ある立場から無理な話と思ったが、もう坂を転げ始めた石のように話は進み出した。そこでYさんは、もうゴチャゴチャ言っても始まらないと覚悟を決め、引き受けた。

偵察隊では、残念ながらノース・コル斜面の雪崩で中国人協力員3名を失った。帰国すると、西堀さんから本隊参加へ強力な要請を受けた。事故を起こした責任を考えると本隊に参加するのが義務に思え、Yさんは再び覚悟を決めて参加した。登山の終盤には重要な判断を迫られた。長谷川良典隊員の心電図に危険な兆候が見られた。亡くなった中国の3人に対する、そして、登頂に懸ける長谷川隊員の気持ちには痛いほどに分かっていった。しかし、ヤルン・カンで心電図に問題がある隊員がアタック隊

として頂上に向かうことを黙認し、そして帰って来なかったことへの反省から、長谷川隊員をアタック隊から外すよう進言し、医師としての責任を果たされたのだ。

こうしてYさんは、中国での登山においてなくてはならない人となり、ナムナニ、中日ネ3国チョモランマほか各隊で、副総隊長など要職を医師兼任で務められた。

チョモランマ隊当時は50歳だったYさんが高所で強いことには、経験豊富な隊員たちも驚くほどだった。7000m、ノース・コルのC4から7600mのC5を往復したときは、体力にまだ充分余裕があり、酸素を使えば8000mまで充分行けそうに思えた、とのことである。そして、その10年後の90年、60歳にして8000m峰シジャパンマに登頂された。

Yさんはいつでも穏やかで、だれにも親しみやすく、また気配りを欠かさず、多くの人に敬愛される存在だった。ご葬儀では、病床にあっても「絶対にあきらめない」と言い続けられたことが紹介された。それは責任感「覚悟」に加えて、Yさんからの最後のメッセージのようにも思われた。

マッシーと私

田中淳一

その不思議な包容力で多くの
人々を惹き付けてこられた北ハケ
岳・黒百合ヒュッテの小屋主、マ
ッシーこと米川正利さんの突然の
訃報に接し、寂しさを禁じ得ない。

ハケ岳地区の山小屋のトイレを
合併浄化槽により水洗化するため
に奔走されたり、ハケ岳山麓を周
回する200kmに及ぶトレイルの
完成に尽力されたり、小屋の経営
を長男の岳樹君に任せ、山岳ガイ
ドをしていたことなど、いわば熟
年期の米川氏の活躍を私は語ること
ができない。風来坊生活を続ける
私に米川氏と奥様が命じたのだ
が、ある女性とのひと冬の小屋番
という型破りなお見合いの末、私
たちは結婚、渡米、そしてカナダ
に移住して36年の月日が流れてし



米川 正利 (よねかわ・まさとし)

会員番号5703 永年会員

1942年 長野県下諏訪町に生まれる

1950年 南佐久郡南牧村海尻に移り、幼少時代を過ごす

1961年 明治大学に入学するもわずか数ヶ月で中退、母が経営する黒百合ヒュッテに入る

1967年 母の死去に伴い小屋の主に

1969年 結婚

2005年 小屋の経営を長男岳樹に譲り、以後、妻啓子と趣味の民芸品を探す旅を続ける

2025年2月25日 逝去、享年84

著書に『山小屋物語 北ハケ岳黒百合ヒュッテ』『ほろ酔い黒百合』がある

まったからである。

55年ほど昔、高校2年生であつた私が大晦日に独り、赤岳鉱泉から天狗岳を越えて黒百合ヒュッテまで歩いたとき、私が持参した父親のピッケル(山ノ内東一郎作)に目を止められた米川氏が、私に声を掛けられたのが氏と私の初めての出会いだった。このころ米川氏は28歳。夏には小屋に宿泊する登山客がその許容人数をはるかに超える毎日で大忙し。半年前に奥様を迎えており、そこに100kgを超える荷物を軽々と背負うという絶対的な体力、気力が加わって、米川氏はまさに男盛りの真ただ中にあつた。

童顔だが固太りした米川氏は、私には少し恐ろしく思えた。昭和31(1956)年に米川氏の母上が苦勞して建てられた平屋の部分が残っていたところで、ランプのほの

暗い灯、大きな薪ストーブを囲む満ち足りた表情の人々、薄暗い壁にポツンと貼られた「晴れてあつた月曜日、ぼくはしみじみ考える」から始まる一編の詩(クマのプーさん)『A・A・ミルン著、石井桃子訳、岩波書店、それらと豪快な米川氏が溶け合つて、小屋は不思議な温かさに満ちていた。

その後、足繁く小屋を訪れた私は、米川氏や大正生まれで仙人然とした小屋番の井出さん、初々しい奥様の啓子さん、そして米川氏を慕つて集まっていた人々との小屋での生活を通じて、独特な価値観を身に付けていった。死亡遭難事故で幕を開けた、苦しかった大雪山岳部時代の私の慰めは、合宿帰りにふらりと小屋を訪れ、ますます元気な米川氏と酒を呑みながら過ごすことだった。このときばかりは遭難体験者としての責任をしばし忘れることができ、心を和ませることができたのだつた。

黒百合ヒュッテは陰りを知らず、いつしか小屋は2階建てとなり、ピアノが置かれ、年に何度か小音楽会が開かれるようになっていた。お会いした当初感じていた米川氏のロマンチズムが一つの形とな

つて表われたものであろう。初めてお会いしたときは恐ろしく思えた米川氏は、私にとっていつしか年齢の離れた兄のような存在に変わつていった。ときにはふたりで小屋の近くにある稲子岳の南壁に登つたり(トップを登る米川氏が全く支点を取つてくれないので、冷や汗をかいた)、越後の八海山への珍道中を繰り広げた。はたまた小屋で大喧嘩の末、米川氏に小屋を追い出された私が、厳冬の黒百合平で泥酔状態のままビバークする羽目になったりもした。

昨年2月、久しぶりに日本を訪れた私は、茅野市に米川氏を訪ねた。以前よりお年を召されてはいたものの、米川氏は相変わらずニコニコされていた。米川氏、奥様の啓子さん、米川氏のお姉様のカッチャンと酒を呑むうち、年甲斐もなく私は泥酔し、初めて黒百合ヒュッテに行ったところに皆で歌った曲を次々に歌い、前後不覚の為体となつた。これが迷惑を掛け通しであった私にとって、米川氏とのお別れの時となつてしまった。

マッシー、長いことお付き合いください、ありがとうございました。

(明治大学山岳部OB)

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(43)『北の山』(伊藤秀五郎著・梓書房)

浜名 純

本書は、伊藤秀五郎が30歳のときの出版である。伊藤は横浜市に生まれ、1922(大正11)年、北大予科入学、農学部動物学科に進み、26(大正15)年に北大山岳部を主軸となつて創立、当時未開拓であつた北海道の山々を対象に先駆的な登山を实践した。

そのころの北海道は、雪と氷に閉ざされた未知の領域ばかりで、「この本を読んで、リュックサックを担いで青函連絡船で津軽海峡を渡った人も多かつただろう」と往時を知る人は述懐している。

紀行編と感想小論随筆編に分かれており、紀行編の「日高の山旅」や



昭和10(1935)年初版発行

「石狩岳とニペソツ」「千島の印象」など、当時の雰囲気を感じやすい文体で伝えてくれる。感想小論随筆編は、著者の山に対する心境や対し方を著わす。冒頭の「静観的とは」では、持論である静観的登山について、「それは山を遠くから静かに観照するという意味ではなく、困難な登山の中にあつて、自己を大自然の中に投入し、渾然と融合することにより喜びを見出すという態度である」と説明する。

第1次南極越冬隊に医師として参加した北大山岳部OBの故中野征紀は、「伊藤の叙情文学は大島亮吉や尾崎喜八と並べて、バタクささもなく、ただの心象風景に終ることなく、日本的雰囲気を感じ取りがなく、優しく、暖かく、ひたむきな素直さが満ちているように感じられる」(「伊藤秀五郎岳兄の追憶」)と評している。

*

伊藤秀五郎は、私にとって北大山岳部の大先輩だ。私も北大山岳部に憧れて津軽海峡を渡ったのだが、『北の山』を読んで感銘を受けたからではなかった。いや、伊藤秀五郎という名前もその著『北の山』も知らなかった。当然、読んだことはない。伊藤秀五郎と『北の山』という本を知ったのは入部した後だった。だからと言って『北の山』を読んでみようとはさらさら思わなかった。そんな本を読む「暇」があつたら、山へ行くか、札幌で酒を片手に山を語らう方がよっぽどいいに決まっている。

私が初めて『北の山』を読んだのは、40歳近くになってからだ。北大の冬季ダウラギリI峰遠征隊に参加した後、どういう風の吹き回しか、柄にもなく「これからはちょっと真面目に仕事でもしてみようか」と思い、山に登らない替わりに山の本でも読もうという気持ちになったのだ。

読んで不思議な感覚に襲われた。『北の山』の一行一行がストンと腑に落ちたのだ。私が現役の山岳部員として北海道の山々を登ったのは、伊藤秀五郎の登山から約40年後である。しかし、伊藤の「北の山」と、

私たちの「北の山」は、同じ「北の山」だった。伊藤の描く風景と心象は、まさに私自身の体験した風景そのものであつた。当時と比べ交通網やアプローチ、登山道などもそれなりに発達・整備されてきたが、「日高の旅」は、変わらぬ「日高の旅」として存在していたのである。

私たちが北の山を旅した現役部員時代からさらに半世紀が経過し、日高山脈は昨年、国立公園になった。折しも来年、北大山岳部は創部100周年を迎える。これを機に記念事業の一つとして「北海道の山岳環境の維持保全」に取り組むことを提案している。

伊藤は晩年、『北の山』以後に書いたものをまとめて、『続北の山』となるべきものを出したいと考えていたが、その希望を果たせず亡くなった。伊藤のその意を知る友人たちは、伊藤の文章を整理し、1976(昭和51)年、『北の山続篇』(茗溪堂)を出版した。「景観十年風景百年風土千年」と言われる。次代を担う人たちが新たな『北の山』を編むことを期待しよう。

文庫版は、中公文庫(1980年初版発行)に収められている。

(北大山の会副会長)

『チベットの七年』

(日・ハラ著・新潮社)

森田栄二



昭和30 (1955)年初版発行

『セブンイヤーズ・イン・チベット』として世界的に有名なこの物語は150ヶ国以上で翻訳出版、映画化もされており、一度は目にした人も多いだろう。著者は1912年、オーストリア生まれの登山家。アイガー北壁の初登頂で知られ、『死のビバーク』や『白い蜘蛛』での雪崩や落石の危機を突破して栄光を掴んだクライマーで、スキーマの名選手でもあった。さらにヒマラヤに飛び、ナンガ・パルバットに挑戦するドイツ登山隊のエースとして期待された矢先に、悪夢のごとく第2次世界大戦が勃発する。ドイツ隊はイギリス軍の捕虜となり、収監されてしまう。

敵国イギリスの理不尽な扱いに脱走を試みるハラーらは当初、ビルマや中国戦線の日本軍に合流す

る目論見もくろみだった。しかし、その行く手には広大で険阻なチベットの荒涼とした高地が立ちふさがる。同僚のアフシュタイナーと2人だけになり、乏しい食糧と寒さに耐えながら当時鎖国状態であったチベットを放浪する。

彼らにはS・ヘデインの探検隊のようなロシア皇帝の援助もなければ、河口慧海えかいのような支援者や求法への信念もなかった。追手から逃亡し日々を凌ぐ「生への執着」以外には何もない。ツォンチャク・ラ(峠)を越えてインドからチベットに密入国してからは絶望的な困難の連続で、辺境の役人に追い返されたり、盗賊に遭い命の危険にもさらされながら聖都ラサへの長い旅が始まる。

穏健な遊牧民に宿や施しを受けながら次第に気候風土に順応し、チベット語にも通ずると多少余裕も出て、山男の本能が目覚める。黄金の僧院のある街トラデュンの近郊にそびえる独立峰のルンポ・カシリだ。2人は何度か偵察行を重ねてスケッチし、ルートを探査し

た。地元役人の制止により登頂はできなかったが、この名峰は平成時代に平出、中島氏らにより登頂(第2登)が成されている。

苦難の末にたどり着いたラサは、真に極楽浄土であった。貴族の知遇も得て土木工事の仕事に就き、しばらく居場所を得た。なんとか認めてもらおうとアイガー登頂の古い新聞記事を誇示するハラーに對して、「西洋人とは違い自分の『我を滅する』のがチベット人の生き方なのです」と諭されるエピソードが映画版には出てくるが、実際にチベット人の信仰心の篤さには感銘し、東西文化の違いを理解し、自分自身を客観的に見られるようになった、と述懐している。

こうしたなか、兄の紹介で若きダライ・ラマ14世と対面したハラーは、お互いに意気投合する。中観ちかん帰き謬りやう論証ろんしやうゲルク派の論理的で厳格な修行を積んだ「活仏」と崇められる少年法王は賢く、好奇心旺盛で、ハラーに映画館を造ってもらい西洋文化や思想に接し、英語の教授も受けて無二の親友となった。しかし、蜜月の時は長くは続かない。毛沢東の中国共産党軍が侵攻し、チベットは悲惨な受難の時代

を迎える。ハラーは帰国し、ダライ・ラマもインドに亡命してこの物語も終焉を迎える。

鎖国時代のチベットとラサの習俗の記録と貴重な写真を多数含む本書は、それだけで歴史的な価値があるが、ハラーの不屈の闘志と流転するチベットの物語は、いわば諸行無常の哀惜の情を伴いながら読者を感動に導く。

帰国後のハラーの山への情熱も変わらず、南米やアジアの高山にも登頂し、日本にも来て翻訳者の近藤等や横川文雄らと交歓している。チベットへの想いも終生変わることはなく、2006年に故国のフリーザッハで亡くなった際には、ダライ・ラマから友情を込めた追悼の辞を贈られている。

栄光を掴みながら一転して戦争や動乱に翻弄ほんろうされながらチベット高地の三千世界を流転彷徨した登山家の波乱万丈の冒険人生は、ほかの山岳書にはない魅力を秘めており、私にとつて稀有な愛読書の一冊となっている。

1981年に完訳版(白水社)が出ており、角川文庫ソフィア(1997年初版発行)にも収録。

(図書委員会委員)

東 西 南 北

板殿正太郎の新たな

写真へ」

牛丸工

今年になって、長野県松本市乗鞍地方(地元では乗鞍とは総称で、標高の高い方を鈴蘭地区、里に近い方を番所地区と呼んでいる)の住人から、古い写真を見てほしいという依頼があったために、ネットで乗鞍に関する古い写真を検索していたら、1枚の写真に目が留まった。「乗鞍仙人」と言われた板殿正太郎である。



神主装束の板殿正太郎

木下喜代男氏がそのように言っているのであるから、現在知られている板殿正太郎の写真は1枚だけなのであろう、と思っていた。乗鞍の住人が板殿の写真を持っていたらしいなあと思いつつ、

そこで、板殿のことを調べ始めると、令和6年7月21日に丹生川文化ホールで「乗鞍仙人・板殿正太郎」について講演した岐阜県山岳連盟名誉会長で飛騨の登山史研究家の木下喜代男氏が語っていて彼のブログには詳細な内容が書かれていた。そこには板殿の写真は実家の「山郷家に残された唯一の写真」と書かれていた。それでどこを調べても、和服に頭にねじり鉢巻きをして左手に杖を持ち、草鞋姿の板殿しか出てこない。恐らくこれが板殿正太郎唯一の写真であろうと思われる。

寄附のお礼とご報告

会長・橋本しをり

日本山岳会では、今年3月に永年会員(*)の皆様へ寄附のお願いをさせていただいたところ、多くの方々より温かいご厚志を賜りました。この場をお借りして、心より感謝申し上げますとともに、そのご報告をさせていただきます。

ご承知のとおり、本会は長年にわたる会員数の減少に伴い、財政状況が厳しさを増しております。創立120周年記念事業の際には、会員の皆様から多大なるご寄附を頂戴いたしましたが、使途が限られているため、通常の会の運営に充てることはできません。これまで経費の見直しや新たな会員の獲得に努めてまいりましたが、成果が表われるには時間を要しており、加えて昨今の物価高騰も大きな影響を及ぼしています。

そのような中、今回のように会の活動全般に対してご寄附をいただけたことは、運営の安定だけでなく、今後の活動を前向きに展開していくうえでも大きな支えとなりました。今回の寄附は、122名の永年会員の皆様から総額453万5000円に上り(5月15日

現在)、年会費と同額の1万2000円を1口として、多くの方々にご協力をいただきました。中には100万円以上のご支援をお寄せくださった方もいらっしゃいました。

このたび、お寄せいただきましたご寄附は、本会の諸活動を支えるため、大切に活用させていただきます。永年会員の皆様をはじめ、温かいご支援をお寄せくださった全ての皆様に、心より御礼申し上げます。

大変心苦しいお願いではございますが、今後もしばらくの間は、会の運営基盤がより安定するまで、引き続きご支援をお願いさせていただくことがあるかと存じます。その際には、どうか温かくお見守りいただきましたら幸いです。

今後とも、本会の活動にご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

* 永年会員は、入会後50年の在籍を経た方に付与される資格で、年会費は免除されます。現在、全会員の約10%に当たる400名以上の方が在籍されています。

当日の準備をしていた。

私は手持ちの膨大な古い写真をときどき眺め直すことにしている。その中で、説明書きに「乗鞍嶽の仙人」と記述のある写真を見つけた。右の写真である。出所は松本市内の大久保家の古いアルバムの中だった。

アルバムの制作者は大久保久壽と言いい、日本の山岳史上、いくつかの貴重な資料を遺した人物で、旧松本測候所の技手を務めていた。小学校の教師をしていた大久保は1904（明治37）年8月23日、松本市内の名士など18人で槍ヶ岳に登頂した帰りの島々宿で記念撮影をしていて、その写真は松本市立博物館で展示されたこともある。

その後、07年に焼岳が約160年ぶりに噴火すると、松本測候所は観測要員を補充したのであろう、08年に大久保は教師から松本測候所の技手に転職し、その後、焼岳・乗鞍岳・御嶽山の現地調査で観測・記録をいくつか残している。また、特筆すべきは、仕事上で知り合った人から歴史的・博物館的なものを頂戴し、いくつかが松本市立博物館に寄贈されていることである。

一つは大正3年8月22日に河童橋のわきで建設中の養老館別館（現在の五千尺ホテル）でウェストンに出会い、咄嗟（とっさ）に扇子を差し出し、そこにウェストンに穂高の山並みの絵と、聖書の一節を書いてもらったものを昭和21年3月に寄贈している。また、大正4年6月6日の焼岳大噴火で大正池が出現した際、上高地温泉場（現在の上高地温泉ホテル）に宿泊していたJ. Merle Davisは当日と翌日にかけて焼岳などの写真を撮影するが、7日の夕刻、調査のために入山してきて温泉場に宿泊した大久保技手と懇意になり撮影した内の6枚の写真を後日、大久保技手に渡し、大久保技手のちに松本市立博物館にこれを寄贈している。

彼の孫の夫人である大久保さんに、板殿の写真の件で問合せてみると、わざわざ写真をアルバムから剥がして、裏面を確認して連絡をくださった。それによると、なんとこの写真は生写真ではなく、ポストカードであるとのことだった。

（以下次号に続く）

支部

だより

宮崎支部 宮崎城跡地散策

支部報の山行計画を見ながら、弱った足腰でついでにいける山行があるのかと考えていたときに、ぴったりの「宮崎城散策」があった。2月9日、この日は雲一つない晴天だが、宮崎市市内でも気温は零下2・9度。とても冷え込み、近くの田畑は凍っていた。しかし、風はなく寒さに負けずこれから歩く宮崎城跡に興味津々。

9時に宮崎城入り口に集合。宮崎城は池内町と上北方にまたがる標高93mの丘陵上にある山城である。登り口の案内板の前で、多田さん、荒武さんから概要を説明していた。

1500年代、城主（藩主）の心理戦などの歴史は残酷で興味深い。9時20分、歩き始めは土の柔らかさを楽しみながら行く。転がって

いる石は丸いものが多く、この高い山の周囲は川底だったことがうかがえる。地層のこと、植物の名前など先輩方の博識にリスペクトするばかり。小さな城とはいえ、防御に有利なように海が見渡せるような高台に位置し、下は垂直の崖。城造りのノウハウがうかがえる。30分ほどで宮崎城の曲輪の一つ、服部城跡に到着。東京から来

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。



服部城跡地で記念撮影

られた城巡りをされている方と出会い、話の盛り上がり方から城は大小に関係なく人気なのだと感じた。土塁、石塔、宮崎城四百年の記念碑が3基あった。次に本丸跡地はきれいに刈り込まれた広い敷地となっている。天守閣跡から街並みを見ながら下りていく。下り始めた向かい側に戦国時代の万願寺跡の墓石を見る。

その後、車で移動し宮崎城の攻

防で勇猛果敢に戦った権藤八右衛門の墓碑を見学する。奈古神社へ参拝の後、平和台公園で昼食。少し風も出てきた13時40分に解散となった。これまで月例山行にあまり参加することがなかったが、できるだけ参加をしたいと思います。楽しい1日だった。宮崎に住んでいながら城が48もあることが知られてないと思うので、折に触れて伝えていきたいと思います。(白賀智子)



図書紹介

野村良太著

「幸せ」を背負って
積雪単独北海道分水嶺縦断記

「幸せ」を背負って



2024年11月
山と溪谷社 216頁
四六判 1600円+税

「いつの日か誰かに、人並はずれた艱難辛苦に耐える精神力と強靭

な体力の持ち主に、挑戦し実現してもらいたい。本州や外国ではなく地元の北海道にこんな素敵なかけがえのないルートがあるのだから、道内のこれからの若き岳人に期待している」(工藤栄一著『北の分水嶺を歩く』(山と溪谷社、1994年)「あとがき」より)。
これは襟裳岬から宗谷岬まで、北海道の分水嶺を17年間、130日かけて完歩した記録である。こ

第38回全国支部懇談会 &

関西支部設立90周年記念式典

関西支部は昭和10年に日本山岳会最初の支部として設立され、今年90周年を迎えます。これを記念して「関西支部設立90周年記念式典」と「第38回全国支部懇談会」を併催して実施いたします。

記念講演はこの夏に完遂予定の創立120周年記念事業であるカンチエンジュンガからK2までの踏査(グレート・ヒマラヤ・トラバース)など。記念山行は東海自然歩道の西の起点である「明治の森箕面国定公園」の箕面大滝から勝尾寺まで歩きます。全国の会員のご参加をお待ちいたしております。

主催 公益社団法人 日本山岳会 関西支部

期日 10月26日(日)・27日(月)

参加資格 会員、準会員、会友および関係者

宿泊 大阪ガーデンパレス(シングルルーム) <https://www.hoteljg-osaka.com>

交通 JR新大阪駅より徒歩10分(シャトルバスあり)

参加費用 2万5000円(式典、懇親会、宿泊、朝食、弁当、バス代含む)

申込み期間 7月1日～8月20日(支部所属会員は支部を通してお申込みください)

送金先 ゆうちょ銀行 公益社団法人 日本山岳会 関西支部 口座番号 0093006155950

日程 10月26日(1日目) 13時30分受付開始 14時30分記念式典

記念講演「ヒマラヤ今昔」重廣恒夫氏ほか

10月27日(2日目)

①記念山行・箕面大滝・東海自然歩道・勝尾寺

②記念観光・箕面大滝と勝尾寺(参拝料は各自負担)

15時ころ新大阪駅またはホテルで解散予定

問合せ 日本山岳会関西支部・事務局長 小黒節郎

090-7728-2773

setsuro.oguro@nifty.com

の「あとがき」を読んで、「ぼんやりと、この若き岳人」というのが僕のことにならないかな……と思」つた著者は、「完全単独ワンシーズンであれば、極地の単独歩行横断に匹敵する、最も困難で素晴らしい記録になることは間違いない」という工藤さんの言葉に触発されて、壮大な計画の実現を決意する。積雪期、単独、総距離670 km（東京～岡山間の距離）、しかもワンシーズンでの踏破という厳しく困難な挑戦。そこで待ち受けていたものは……。

本書は「第一部 山の世界で生きていく」と「第二部 北海道分水嶺縦断」の2部構成となっている。「第一部」では、野球漬けだった大阪時代から始まって、北海道大学入学、ワンダーフォーゲル部との出会いを経て次第に登山にのめり込んでいく著者。4年間の部活動を終えた後は2019年春、単独での積雪期知床半島全山縦走や日高山脈全山縦走を成し遂げ、さらに経験を積んでいく。その直後に読んだのが志水哲也著『果てしなき山稜 襟裳岬から宗谷岬へ』（ヤマケイ文庫、2016年）と件の『北の分水嶺を歩く』だった。

機は熟した。2021年3月、一度目の分水嶺踏破に挑むため襟裳岬から北上、50日間の計画で一路宗谷岬を目指したが、出発からわずか12日目、日高山脈南部での撤退という結果となった。「こんなにも惨めで虚しく情けない下山は初めて。全ては僕の実力不足で、今回の計画で自分に足りないものがたくさん見つかった。この気持ちを忘れないようにする」と素直に反省している。

「第二部」が本番で、日記形式の縦断記となっている。出発前に毎日、日記を書くことを決めており、5万分の1地形図の裏に記されたという記述は、臨場感たっぷり。

2022年2月26日、「北上の方がロマンを感じる」という甘い考えは捨て、今回は宗谷岬から南下を始める。「僕のこの計画の核は『山に感じる幸せ』だ。（略）『あいつ、こんな大変そうなことを、こんなに幸せそうに楽しんでいやがる』そんな旅にしたい」と綴る。

それを受けて、縦断もフィナーレに近くなった楽古山荘で停滞中、「2か月、とても長かった。とても充実していた。こんなにも濃密な2か月は今後の人生にももう訪れ

ないかもしれない。辛いことが90%以上だったけれど、残りの10%が補って余って溢れるほどに幸せに満ち足りていた」と素直に述懐している。

著者はこの記録で「第27回植村直己冒険賞」を受賞しているが、記者発表での発言といい本書の読後感も、若者らしい爽やかさと謙虚さを感じさせ、好感が持てる。

なお、ジャケットの裏が全行程図となっているのも便利。

(節田重節)

宇井忠英著

現場で熱を感じ探る 火山の仕組み



2023年9月
ベレ出版 304頁
四六判 2200+税

1991年、雲仙・普賢岳が噴火し、山頂部に形成された溶岩ドームが崩れて火砕流が発生した。この高温・高速で流れ下る火山現象に巻き込まれて43名が犠牲になった。私たちは耳慣れない「火砕流」という現象をTV放送で目の

当たりにして、そのエネルギーの凄まじさに驚いた。

23年後の2014年に、旧来「死火山(現在の分類はない)」と言われていた御嶽山が噴火。水蒸気爆発によって飛散した噴石(火山弾)と同時に発生した火砕サージなどで、山頂付近にいた登山者63名が犠牲となった。これらの報に接し、改めて火山噴火の猛威を知り、なぜこの現象が起きたのか詳しい知識を得たい、と思う人は多かったに違いない。

本書は火山の本質に迫り、かつそれらを分かりやすく説明してくれる。著者・宇井忠英が長年にわたり日本国内と世界の火山を巡って調査し、考察したその成果を著わしたものだ。タイトルの頭に「現場で熱を感じ探る」とあるのは、それぞれの火山を直接目で確かめ、いまこの火山はこれまでどのような活動し、今後どのような現象が起きるかを臨場感・緊張感を持って伝えようとしているからだ。ペー

仕組みを現象ごとに説明していく。全体構成は9つの章からなる。

1章は「流れる溶岩」。噴火の象徴とも言えるマグマが地表に流れ出る溶岩の形態説明だ。流れやすいものと、にくいものの差は熱と質により多様であり、作り出す溶岩堤防や溶岩トンネル、陥没火口、溶岩湖、溶岩台地など様々な形態を解説する。特に溶岩の粘性(珪素Ⅱガラス質の多寡)と流れ方によって楕状火山・成層火山・溶岩ドームに種別され、それぞれの特徴を説く。

2章は「降りそそぐ噴出物」。噴火によって空中に放出された火山灰や噴石についてだ。これらが降り注ぐことで形成された地形を観察し、その種類と降下した際の様子を解説。また、噴煙の黒と白の違いや、降下する火山灰のサイズ、表面形状の差で降灰の様子が変化すること、そして、降り積もった火砕物が形成する火砕丘や柱状節理、溶結現象などを、富士山、ルソン島・マヨン火山を例に解説する。また、多量の水分が熱せられて起こる水蒸気噴火爆発について安達太良山・沼ノ平、但多楽火山・地獄谷、有珠山などを例に説

明。火山灰が飛行する航空機にダメージを与える事故にも触れる。

3章は「マグマの通り道」。マグマが火道を経由して火口に達するメカニズムを解説(火山性地震にも触れる)。また、地層の割れ目に沿ってマグマは貫入し、岩脈を作るなど、一連の複雑な動きを富士山や各地の火山で解説する。

4章は「割れ目は語る」。噴出した溶岩が時間経過に伴い形を変えていく。特に温度変化で多様な割れ方(節理)が生じ、この露頭観察で過去の噴火の様子を知ることができる、とする。

5章は「火砕流とその仲間たち」。成層火山で発生した火砕流として有名な、ベスピオス火山の火砕サージ(79年に発生)を採り上げている。また、縄文時代の大隅半島での大火砕流を検証。さらに火砕流という噴火現象を研究者たちがこれまでどう解き明かしてきたかを紹介。

6章は「火山が崩れる」。火山は成長と同時に形が変わることがある。山体崩壊や岩屑なだれだ。北米のセント・ヘレンズがきっかけで認知された噴火現象だ。明治21年の磐梯山噴火も山体崩壊を起こ

し、その姿を大きく変えている。

7章は「マグマと水のせめぎあい」。海底(水中)火山噴火は陸上噴火の様相と噴出物に違いがあることを説明。水の多いことで枕状・水冷破碎、入水溶岩などが現われ、水中での火砕流も起きる。西ノ島新島や米国デスバレー国立公園などを例にする。ここまでは、噴火に関わる現象の解説だ。

8章は「火山がもたらす災害と防災対策」。火山の営みが理解できていれば、万一噴火に遭遇しても災害から逃れる可能性があるとする。噴石の飛来、降灰、溶岩流、火砕流、火砕サージ、火山泥流、地盤の変動、火山ガス、岩屑などなどの災害事例と、出遭った際の対応や避難方法だ。前述の普賢岳や御嶽山の火山災害の対処につながる知識だ。

最終の9章は「火山の基礎知識」としてマグマのでき方、火山岩の分類、火山砕屑物の分類、噴火様式の名称、噴火の規模など体系的な解説がなされ、本書を読み進めるためにセットで活用したい。このほか、本文の間に火山を話題とした興味深いコラム8編が収録されている。

(原邦三)



令和7年度第1回(4月度)理事会 議事録

日時 令和7年5月15日(木) 19時

00分～21時10分

場所 集会室およびオンライン

(zoom)

【出席者】 橋本会長、永田・桐生・

飯田各副会長、長島・南久

松・平川各常務理事、松田・

川瀬・望月・原田・猿渡・

池田・久保田各理事、石川・

清登各監事

【審議事項】

1・令和6年度事業報告の承認について(長島) (賛成14、反対0)

2・令和6年度決算報告の承認について(長島) (賛成14、反対0)

3・静岡支部長の交代について(長島) (賛成14、反対0)

4・宮城支部長の交代について(長島) (賛成14、反対0)

5・青森支部長の交代について

(賛成14、反対0)

(長島) (賛成14、反対0)
6・ウェストン祭の助成の件(長島) (賛成14、反対0)

【協議事項】

1・支部連絡会(5月28日実施)について協議した(長島)

2・事業計画未提出の支部の取り扱いについて協議した(長島)

3・委員会・支部ヒアリングおよび評議員懇談会の結果について協議した(長島)

4・会員カードのアプリ化における「店舗アプリ」導入について協議した(永田)

5・総会決議を電子的手法で行なうことについて協議した(永田)

6・団体会員の取り扱いについて協議した(永田)

7・ホームタウンちよだ応援事業について協議した(長島)

8・ドネーションプラットフォーム「OSSUSO」について協議した

(長島)

【報告事項】

1・入会者承認報告について(橋本)

2・永年会員からの寄附について(長島)

3・山研のゴミ収集に関する件について(原田)

4・山研利用要領の追加・修正について(原田)

5・静岡支部事務局長の交代について(長島)

6・福井支部事務局長の交代について(長島)

7・埼玉支部事務局長の交代について(長島)

8・山形支部事務局長の交代について(長島)

9・東京農業大学農友会山岳部創部100周年記念祝賀会について(長島)

ルーム日誌 5月

1日 山岳地理クラブ

2日 入会説明会

7日 山行クラブ

8日 常務理事会 YOUTH CLUB委員会

9日	記念事業委員会(国際交流)
12日	図書委員会 スケッチクラブ
13日	アルパインスキークラブ
14日	広報委員会 フォトクラブ
14日	財務委員会 山想クラブ
14日	かつばの会
15日	理事会 山遊会
16日	自然保護委員会 クニ塾
17日	アルピニズムクラブ 記念
17日	事業委員会(コーカサスの桜)
19日	総務委員会 登山講習会
19日	(東京支部)
20日	総務委員会(グッズ) アル
20日	ピニズムクラブ 麗山会
20日	沢登り同好会Ⅱ バックカ
20日	ントリークラブ
21日	東京支部 三水会 アルパ
21日	インスキークラブ(幹事会)
22日	学生会 みちのり山の会
23日	東京支部 科学委員会
26日	記念事業委員会(引き継が
26日	れる山岳祭) YOUTH
27日	CLUB委員会 緑爽会
27日	支部事業委員会 平日クラブ
28日	支部連絡会 子どもと登山
28日	委員会
29日	記念事業委員会(グレート・
29日	ヒマラヤ・トラバース)
30日	創立120周年記念事業委
30日	員会 記念事業委員会(山

31日	岳古道調査
31日	アルピニズムクラブ
5月来室者	335名
会員異動	
物故	
赤羽孝一郎(3802)	25・5・19
齋藤 武(4923)	25・3・30
遠山誠之介(6815)	25・5・9
立花幹雄(8826)	25・1・11
武田幸男(11008)	25・2・22
舟橋栄子(12694)	25・4・25
天野俣明(14117)	25・5・18
山口竜朗(15965)	24・12・2
退会	
小野龍彌(5714)	
門井邦夫(5833)	
永野敏夫(9494)	
宮崎 徹(10205)	関西
穂苅康治(10603)	信濃
大塚和子(11547)	関西
山影一司(11869)	青森
三國晋誼(11986)	
富岡一郎(12102)	神奈川
舟根 章(12323)	神奈川
小宮山和也(12555)	
上田京子(13317)	
岩田孝司(14073)	静岡
相原俊夫(14085)	埼玉
鈴木壮一(14191)	越後

森 仁義(14420)	広島
竹中美幸(14685)	岐阜
四宮林三(15079)	宮崎
居谷千春(16037)	関西
境 卓也(16577)	東九州
中野 俊(16650)	
鈴木隆太郎(16682)	
大竹優一郎(17410)	

大宮慶悟(17418)	
岡谷雄一郎(A0471)	関西
高杉博和(A0489)	京都・滋賀
牛尼泰史(A0492)	
土井俊和(A0551)	関西
河野めぐみ(A0552)	静岡
石藤奈保子(A0556)	青森
小玉 等(A0645)	埼玉

INFORMATION

告知

◆第32回展「心に映る山々」
アルパインフォトクラブ
2025年度本展を左記の日程
で開催します。国内、国外の山で
四季折々に撮影した全紙作品約35
点を展示します。自然の変化の一
瞬を捉えた写真表現の意図を感じ
ていただければ幸いです。
会期 8月19日(火)〜24日(日) 10時
〜18時 最終日は16時まで
会場 JCⅡクラブ25 東京都千
代田区一番町25番地 JC
Ⅱビル地下1階 東京メト
ロ半蔵門線半蔵門駅・4番

出口 徒歩1分
☎ 03・32261・0300
<https://www.jcii-ceramuseum.jp>
なお、10月に高尾599シユ
ジアムにて第32回展(2回目の展
示)を予定しています。詳細は改め
てご案内いたします。
問合せ 田口克彦 taguchi@
mvg.biglobe.ne.jp ☎ 09
0・8034・20003
花澤廣巳 hnzwa-hirumi@
xg8.so-net.ne.jp ☎ 09
0・7827・0155

寄附金および助成金などの受入報告(2025年6月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
石川 春 会員	75	登山道、山小屋等 山岳環境の維持管理
永田こうたろう 様 (ユーチューバー・コウタロー氏)	50	山岳および山岳関係で 働く人の支援
三井住友信託銀行	200	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
富士電機㈱	50	同上
電源開発㈱	100	同上
コニカミノルタ㈱	200	同上
㈱エリオニクス	100	同上
高尾登山鉄道㈱	150	同上
伊藤ハム米久ホールディングス㈱	50	同上

◆創立89周年日本山岳画協会
日時 6月29日(日)～7月5日(土)

11～17時、初日は正午から、
最終日は16時まで。

会場 東京交通会館B1 ゴール
ドサロン(〒100-0000)

06 東京都千代田区有楽
町2・10・1 ☎03・32
15・7933)

問合せ 杉山修(日本山岳画協会
代表幹事) ☎090・54

40・4552 ☎
sugiyama@samuhanga.
com 日本山岳画協会URL
https://sangakuga.com

越後支部主催 第68回高頭祭(同時開催 第70回 記念弥彦山たいまつ登山祭)のご案内

日時：7月25日(金)午後より、日
程は左記のとおり(小雨決
行)

場所：新潟県弥彦村 弥彦山
大平園地高頭仁兵衛翁寿像
前 弥彦ロープウェイ山頂
終点駅より徒歩約15分

内容：日本山岳会創設メンバ
ーで、第2代会長を務めた高
頭仁兵衛翁の遺徳を偲び顕
彰。参加者全員で献花と女性
陣による献酒のセレモニー
や記念講演を行ない、会員間
の山談義で交流を深める機
会とします。弥彦山たいまつ
登山祭は、弥彦神社灯籠祭り
の一環として弥彦山岳会主
管で行なわれます。

講演：日本山岳会副会長・桐生
恒治 「日本山岳会120周
年と高頭仁兵衛」

日程：14時 弥彦山大平園地
高頭仁兵衛翁寿像前集合
14時30分 開式宣言(支部
長・来賓挨拶、献花・献酒・
記念講演など)
15時30分 閉式宣言(終了後
大平園地休憩広場にて軽食・

歓談)

16時 大平園地より弥彦本
山奥の院へ移動(徒歩約30
分)

17時 奥の院にて安全登山
祈願祭

18時 たいまつ登山開始
19時30分 弥彦神社境内拝
礼後、神社参道から弥彦街中
へたいまつ行進

20時30分 弥彦駅前にて解
散

注意1：高頭祭は自由参加で人数制
限はしませんが、たいまつ登山祭は
健脚向け行事です。越後支部理事の
弥彦山岳会・小林頼雄会長より、弥
彦神社神事で弥彦村祭礼行事であ
ること、6月30日までに参加申込み
が必要で、参加人員を調整する場合
もあります、とのこと。

注意2：梅雨明け後の炎天下行事の
ため、飲料水・帽子・タオル・雨具
などを各自持参ください。服装や靴
は、ハイキング程度で構いません。
問合せ先：越後支部事業委員
長 小山一夫
☎090-5219-7432
✉ihkt9393@yahoo.co.jp

◆編集後記◆

●二十数年ぶりに薩摩硫黄島に行
ってきました。渡島前日、鹿児島
市内のホテルのフロントで「明日
はどちらへ？」と聞かれたので、
「硫黄島に」と答えたところ、案の
定「ああ、あの映画になった島です
ね」との反応。いやいや、こちらは
小笠原諸島の「イオウトウ」。鹿児
島県民でも知らないのですね。
●もちろん秘湯マニア垂涎(すいぜん)的
である東温泉も満喫しましたが、前
回の旅で見落とした「昭和硫黄島」
を硫黄島に接近する直前、船から
確認することができました。これ
は昭和9～10年に海底火山の噴火
でできた小島ですが、島と言って
も岩礁で、最高地点の標高は26m。
それでも現代に誕生した鬼界カル
デラの一部を目の当たりにでき、
大いに満足でした。(節田重範)

日本山岳会会報 山 961号

2025年(令和7年)6月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重範
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社